




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2796 号	氏名	野北 英史
審査担当者	主査	大島 孝一	(印) 
	副主査	矢野 博久	(印) 
	副主査	佐田 通夫	(印) 
主論文題目 : Objective Detection for Biliary Tract Carcinoma Using Autofluorescence Imaging (胆道癌に対する自家蛍光観察)			

審査結果の要旨 (意見)

摘出臓器を、実体顕微鏡を用いて Auto Fluorescence Imaging (AFI) し、胆道癌の病変の範囲について評価した論文で、胆道疾患 19 例 (胆嚢癌症例 1 例) と Groove 膵癌胆管浸潤症例 2 例を対象としている。今回の検討では、腫瘍の領域性は肉眼型が乳頭型、結節型に関しては、AFI にて癌部はマゼンダ色して描出され、非癌部とのコントラストが付き、病理組織学的に一致した。一方、平坦型に関しては不明瞭で一致しなかったが、胆管癌の粘膜病変の範囲を診断する術として、AFI が有用であることが示唆された。今回の結果は、今後の治療法の開発の可能性を示唆するものである。審査にあたり、今後の展開、また研究内容に対する質問にも的確に回答が得られた。この論文は十分に学位に値するものと考えられた。

論文要旨

目的: 胆道癌は難治性癌の一つである。画像診断の進歩により、診断能力や治療成績は大きく向上した。しかしながら、胆道癌における病変の範囲の評価には、術中に凍結切片による迅速検査に頼らざるをえないことが少なくない。我々は、摘出臓器を実体顕微鏡を用いて Auto Fluorescence Imaging (AFI) し、胆道癌の病変の範囲について評価した。

方法: 平成 22 年 4 月から平成 23 年 12 月までの期間に久留米大学病院にて施行された胆道疾患 19 例 (胆嚢癌症例 1 例) と Groove 膵癌胆管浸潤症例 2 例を対象とした。AFI で観察した腫瘍粘膜の領域性について AFI と病理組織像との関連を検討した。

結果: 腫瘍の領域性は肉眼型が乳頭型、結節型に関しては、AFI にて癌部はマゼンダ色して描出され、非癌部とのコントラストが付き、病理組織学的に一致した。一方、平坦型に関しては不明瞭で一致しなかった。

結語: 胆管癌の粘膜病変の範囲を診断する術として、AFI が有用であることが示唆された。